IOM

Eldonas Kou MUKAI
2-12-12, ASAHIMAĈI, ABENO, OSAKA, JAPANIO
11, Nov. 1983 N-ro 273

イオム通信

大阪市阿倍野区旭町2-12-2 向井孝

▼詩集への感想を思いがけない人からもらったりして、毎日ニヤニヤよろこんでいる。〈ぼくはものすごい俗物なんやなァ、とこんどはほんまによくわかった〉。詩集を出す前までは、〈自分が詩集などもらったとき、どんな返事をかくかを思えば、よく知れるように〉、挨拶代りにかいて出す感想は、まあそこその外交辞令がほとんど、忙しいときにはむしろ迷惑ー、そんな詩集なんて決して出すまい、と思ってたのに、例え一行でもかいてきてもらうと、その裏の裏の意味まで汲みとろうとよみかえす。みえすいたおせ辞でも何でももう判別なしに受取って、ふうんそんな風によんでもらえたんかァー感激感謝して、部屋の中をぐるぐる歩きまわる。ほんまにうれしいもんや。郵便がこない日曜は、気がぬけたみたい。〈その代り月曜はどさっ?ときて、倍のたのしみ〉。感想まだの方、敬老?サービスどうか、まってマース。芳村くんいい手紙ありがと。

▼ガサ対策のため、ぼくは住所録も電話帳もない。それで来た手紙の封筒裏の来信者住所氏名の部分を切りぬいて、発送用の封筒に貼る。その他「宛名記入・切手貼付」のイオム発送用封筒をまとめてもらってる方は、その一枚を抜いて発送するーというシステム。どうか協力を。（7日）

◇◇◇◇◇◇

ギョッとする!!

ー詩集を出したこそで判ってきたことー

▼まだ詩集を出して一カ月にならないから、これをかくのは早い気がするが、感想を下さった方にはイオム通信やウリニューズ非暴力直接行動を送ると、詩集末尾にかいたこともあり、とりあえず思いつくことを、順不同にかいておれがわりとする。今回は、集中の三篇について。

（7日）

①《熱烈歓迎?!自衛隊様》《十一月三日の、戦争と平和》の二篇は、軍事費拒否関西グループが提起した行動に参加したルポ?だが前者はエライ苦労してなんども書き直したことで、自分ではなっとくした作品の部類にはいる。ところでこの詩集にかいたことの内容は、全部ホンマにあったことばかりなのだが、唯一、この〈熱烈歓迎…〉だけは、一部だけ事実とちがっている。それはぼくら20人あまりがホームで、隊員に呼びかけた内容が、詩とは全くさかさまのー「お国の為にいさぎよく死んで下さい」「もう二度と帰ってこんでエエよー」「はよ戦死するように、ガンバリやァー」という多分に皮肉な意味をこめたものだった。そのときぼくは、なんかがノドにつかえて、声がすうっと出にくかったのだが、詩としてそれをかこうとして、またそこでつかえた。そしてようやく、発表のように改訂することで落付いた。

それは、相手と自分との関係を単純に敵・味方に二分してしまうことで尚更、相手を敵へと押しやっているーというあやまちを実感的に照し出すとともに、そうであってはならない闘いの方向性ーどのように闘うかーを、（詩が）明らかにするものだった。

②後者《十一月三日の…》は、前夜ビラ作りを一しょにしたが、ぼくは現地へは行かず、逮捕などの事故時の連絡電話番として事務所詰だった。で、ふう子さんからの報告を聞きとってかいた。まるで見てたようや、と言われたが、もう7年ほど前の岩国米軍基地オープンデーでみた状景が、重なっている。

『ビラ渡そうとしたら、みな隊員の家族にみえる』『こらアカン…自分の心が縛られてしもて…』ーというのがその日のみんなの感想だった。

なんでやろか? その答を、ぼくは〈詩をかくことで〉見付けだしたわけである。

『ー考えてみると、家族たちの平和をかきみだして、戦争を仕掛けるのは、こっちになってるやないか…』『そこでゲリラの戦陣訓。「平和の力をこそ、自分のものとして闘うのでなければアカン」』

だが答は、分析あるいは解釈以上を出ず、「平和の力をこそ」が仮に答としての方向を出しているとしても抽象的すぎて、あいまいすぎる。〈詩〉として、この〈十一月三日の…〉をかいたことで、以来、ぼくの心にずうっとかかっているのは、いつもそのことーそんな状況の中での具体的な闘い方ーだとも言える。

横堀店の関東煮をつついている隊員と家族の団らん。兵器展示広場いっぱいにはしやぎまわる子供たちの平和・こんど〈詩集〉を出して、改めてこの詩をよみかえしながら、みるみるぼくに判ってきたことはーあの自衛隊デーでみんなをとり囲んだ〈疑似的な平和〉は、〈そして戦争を仕掛けるのが、こっちになっているどうしようもない平和は〉、囲われた自衛隊構内だけでなく、自衛隊デーの一日のみにとどまらず、ぼくらの身のまわりの隣人たち、職場・学校・映画館から路上に至るまで、すべて全くそれそのものとして存在しているーということ。しかも、そのことには、頭では判ったとしても、ほんとうにぎょっとする程には気付いてはいない、ということだった。そのことが、問題のあまりの大きいこともあわせて、容易に「答」を見出せない原因だということもー。

向井孝小詩集
一部 送共 1,200円

③「ぎょっとする程には、ぼくらは気付いてはいない」と言ったが、この詩集が出来上って、ざっと校訂がてらよみかえして（58頁「たしかに」前の空行ヘツメル。P119段名〈補遺〉誤植。P149組（ズレ）ミス。P108移りから二行二字目、「ら」の欠字）、目をとじ、自分なりの全体の印象をまとめようとしたとたん……「ええっー」と声が出た。思わず「ぎょっ」として、まわりをみまわした。……

…この詩集の詩が、とくに第Ⅱ部にあつめたものが示している警備の状況は、とても常識では考えられへんことやんが!

つまり、違法とも過剰とも…もう常軌を逸した、この権力の異常な形相は、ホンマに「ぎょっ」とするこって やんか！

そのうえ、その異常を異常とせず、まるで平気な顔をして暮してるぼく！異常にすっかり馴らされたその感覚と反応！その鈍感！しかもそのようなぼくに、ぼく自身、今までつい気付かなかったということの「ぎょっ」とするような空おそろしさーは、さらに又々ぎょっとすること、やんか！（たとえば鏡を向いあわせたくらいマジックミラーの部屋に入れられ、とたんにパッとスポットライトに照し出されて、無限に重なりつづく自分の姿をみて、ぎょっとするようなー）

（このことは又改めて、別の視点からかきたい）

* * *

④《同行四人》は、異常な警備が、ミステリー以上のものになってきていることが、題材である。だが現実の問題としてこのミステリーのナゾを解き、対応策や攻撃策がたてられねばならない。

ーこんな信じられんこと〃誰ひとりいない山中に、そこまでは絶対ついてはいなかったもう二人の尾行が、忽然とあらわれるナンテ〃を、どう判断したらエエのか。

そこでもう一度、経過を辿りかえしながら、飯田はる久さん（東京拘置所在監）が当時に送ってくれた解釈を手引きに、一体どう尾行らがうごいたか、想像してみるとー

㋑ 金沢ユキは手紙で、金沢反戦市民社Iさんに「近く、遊びにいく。日時未定。駅から電話する」といった程度の予告をしたことがある。

㋺ 前夜、るり子ハンに「明日いく。るすたのむ」と話した以外、周辺は誰もしらぬ筈。（これが洩れたとは思えない。尾行は遠出の用意がなく、法い上着でさむがっていた▲）

㋩ 当日（金曜日）朝8時半、家を出て天王寺駅へ（尾行に気付かず▲）

㊁ みどりの窓口で津幡ユキ二枚（普通券のみ）購入。（周辺に人なし。但しすぐ尾行がきて行先をたしかめたにちがいない▲）

㋭ 環状線で大阪エキへ。乗替、11番ホーム近くまでくると発車ベルがきこえる。階段をかけあがって、やっととびのった瞬間、ドアーがしまり発車。特急停車は：京都、敦賀、武生、福井……。

（▼ヤ一のミステリー。この状況で、どうやって、尾行（2人）は同乗できたか。ー尾行してるのが察知されると例えば電車のドアーがしまる間際にとび乗ったり、又とび降りをやられて、まかれたりする。そんな要注意の尾行の場合、四人が〈先行〉と〈後〉と二人ずつにわかれ、サンドイッチにして尾行する。主役はもちろん〈先行〉。先行ーつまり先廻り尾行をやるためには、ホシがうごくとき、この方向をとったらどこへ行くという、日頃の外出パターンの統計でまず行き先き方面を推定、みつからない距離で先行する。二人連れなら、小型警棒型の超指向性高感度マイクや読唇術（双眼鏡）などを利用、百メートルぐらいの距離でも、会話をばっちり盗聴。切符を買うのをみたら、〈先行〉は先にホームへ走り電車にのり込む。ホシが乗らぬときは、発車まぎわにとびおり、次の電車にのってまつ。この先行尾行で、〈先行〉二人は、〈後〉から〈北陸線金沢ユキ〉の情報をうけとって、11番ホームの先発列車にのりこみ、ぼくらが乗るのを待ちうけていた！ということになる。これしか考えられない。）

㋬ 金沢着。地下出札口を出て数十メートル。ふと尾けられてる感じ。見当らず。念の為、駅地下の旅行案内所にさっと飛び込んで約20分。それからバス（待合せ20分）Iさん宅着5時。夕食、来訪者数人と10時すぎまで。そのあと明日（土曜）日帰りでいけるところを地図で探して、ともかく「白山下」までいってみて、あとはそのとき…ときめて就寝12時。

（▼あとで判ったのだが、I宅から約三百メートル、よく見透せる保育園横に乗用車が一台、夜もずうっと駐っていた。男が四人（うち二人は石川県警の応援?）。I宅は郊外の田んぼや畠の中にあり夜は暗く人通りもない。尾行はI宅近くまできて、おそらく茂みにかくれ、ボタン位のマイクと無線を組合せた「盗聴器」を壁か窓にはりつけたのでは…。（盗聴器にテグスをつけておいて、人がきたらパッとひっぱがす）とすれば、白山下ユキの会話はつゝぬけ）

㋣ 朝八時半、Mさんの車で野町まで運んでもらう。（▼尾行車〈後〉に気付かず。〈先行〉はすでに野町の駅の物陰等でぼくらの来るのを待っていたにちがいない。）

㋠ それからあとは〈同行四人〉の詩の通り。そこでー

（▼ヤ二のミステリー。人影も人家もない山中の道の前方からどうして〈ゴルフ帽〉が現われたか。ー〈先行〉の二人は、野町で次のような打合せしたにちがいない。「一輌だけいうのはマズいな。そんなら、俺、ダミーでやることにするわ。きみ、離れて先行をたのむ。オトリになってひきつけるさかいナ」

そこで〈先行〉の〈ゴルフ帽〉は、車をとばして、白山口へ急行。ホシが到着したら、周辺?を歩き出すものとして、路傍にかくれて待機。ところが雨で、一里野温泉行バスに乗りこんだので、「オーイ、まってくれー」とばかり大あわてでとびのってきて、とうとうバレタ、ということになる。しかし、たまたま、一輌きりの電車や、他の乗客なしのバスにのったから、バレタものの、そうでなかったら、果して一体……と考えるとー）

▼さて、尾行の正体がバレたあとのそれからはー、そして翌日、翌々日はーという、ちょっと面白い後日譚もあるんやけど、省略してー。ともかく、こんな風にミステリのナゾを解いてみると、「なァんや、そんなことかァ」ということになるやろう。ぼくらが小説や映画の主人公やあるまいし、ほんまに念の入りすぎた尾行をして、呆れるというよりアホラシヤー。一体どんなつもりやねん、とどなりつけたいところだが、そのどなり声はどこへも届くわけもなく、虚空へ吸いとられてしまう。

明らかに法律違反の盗聴などやっているのに、どうしようもない。全く歯が立たないー この奇怪さ、無法さ、がまかり通っている異常さ。そして、ヤ一、ヤ二のミステリーにもまして、容易にそのナゾが解き難い、これはヤ三のもっと大きいミステリーといわねばならんのやないか。そのことにギョッとする！

* * *

⑤ 秋山さんが詩集の〈末尾に付して〉で「向井君の詩は抒情詩である」と書いている。ぼくは、一も二もなく「そうや。うまいこと見抜かれたし」と思う。そして、とくにこの詩集に関して云えば、「これ、みんな〈悪愛抒情詩〉なんや」と。（未完的終了）

* * *

▼ 反原発新聞の購読者名簿を（犬山ー大阪往来の間にとりまぎれて）どうやら紛失したらしく発送できずに、ほとほと狼狽困却しています。今迄ウリ文局から送付をうけておられた方、大へん申しわけありませんが、葉書で、新聞未着とご一報下さい。

▼ 犬山の方にも電話ひきました。0568ー62ー5931。 8日記